

小西甚一著「俳句の世界」講談社学術文庫、講談社 1996年1月10日刊を読む

俳諧と俳句

1. 「俳句とは何ですか」。
2. (1)叔父さんにでも質問してみるがよろしい。
(2)かれは、たぶん「古池や蛙とびこむ水の音」みたいなものさ——と返事してくれるはず。
(3)念のために、もういちど元禄大學國文學科教授青成顕太郎博士に同じことを質問してごらん
なさい。かれも「古池や蛙とびこむ水の音」によって代表される形態および特質を有する文藝
的ジャンルのひとつである——とおもおもしろく述べてくれる公算が大である。しかし、わたく
しは、まったく反対の意見を表明したい。「それは俳句ではありません」。俳句でなけりゃ、
いったい何だい——とおっしゃいますか。わたくしは「それは俳諧の発句ですよ」と申し上げ
るつもりです。
3. 俳諧は、詳しくは俳諧連歌で、正式の連歌に対し、ずっと砕けたおもむきのもの。実例はあとで
御覧にいますが(35 ページ参照)、百句と三十六句とかをつらねてゆくので、通称を「連句」と
も申します。その第一句だけをとりだして「発句」と名づける。発句と俳句とは、形式も表現方法
も同じことで、その点では区別できない。それなら、どこで区別をつけたのだいと詰め寄られるこ
とになりますが、わたくしは、両者の待遇がすっかり違ってるのですよと申しひらきたい。
4. そもそも、正式連歌の時代から俳諧連歌にいたるまで、共通の特色がふたつある。その第一は、
作者と享受する者とが同じグループの人たちであること、第二は、それを制作ないし享受するた
め特殊の訓練が要ることにほかならない。
5. 平安時代以来、作者と享受する者とがはっきり別である種類のわざは藝術にあらずとする意識
が、根づよく存在した。もちろん、その反対は、藝術なのである。いまわたくしたちは、画や彫刻
を藝術だと意識する。しかし、それらは、昔の人たちにとっては、けっして藝術ではなかった。そ
れらは工芸品にすぎず、その作者たちは工(職人)なのである。かれらにとっての藝術は、書であつた。
書の巧みな人は、りつぱな藝術家として尊敬された。なぜなら、書を享受する人は、同時に書
を制作する人だからである。和歌も藝術であつた。和歌を作る者が、同時に和歌を享受する人だか
らである。しかし、物語(小説)は、藝術でない。なぜなら、自分で物語を作る者だけが物語を享受
できるとは決まっていなかったからである。その意味において、俳諧は、藝術であることができた。俳壇
は、作者兼享受者である人たち——巧拙は別として——によって構成されたからである。したがっ
て、大作『南總里見八犬傳』の著者曲亭馬琴は「戯作者」にすぎなかったが、くだらない句をたく
さん生産した井上士朗は「宗匠」として、馬琴よりも資格が上だったのである。藝術であるとか

いとか割りきった論がすこし強すぎるとお感じならば、桑原武夫氏の用語を拝借して、俳諧は作者と享受者が共通だから、当時の第一藝術であったといってもよろしい。

6. 次に、俳諧を享受するためには、特別な心得^いが要る。二段切れとか大廻しとかの「切れ字」用法もあれば、句趣の「さび」とか「かるみ」とかもあり、もっと根本的には「この句のどこがおもしろいか」を感じとる感じかたまで、ちゃんとした筋道があり、それを体得するのでなければ、正しい理解が難しい。そのためには、師匠からの伝授が必要であって、自分勝手な理解のしかたは、無益でもあり有害でもあるとされる。そこには、特殊な享受のしかたを訓練された人たちだけの構成する世界ができるわけで、その世界のなかに身を置かないと、俳諧を享受することができない。だから、俳諧は、ひとつの「閉鎖された世界」であり、また「自給自足の世界」でもあって、どこからでもおいでなさいの自由貿易国ではない、その点は書でも和歌でも、同じことである。

7. ところが、俳句になると、すっかり逆である。俳句とは、正岡子規による革新以後のものをさすのだが、それは、かならずしも作者イコール享受者であることを要求しない。俳句づくりだけを職業としても、世界は藝術家だと認めてくれる。俳句を作らない俳句評論家が出て、俳壇から蹴り出される心配はない。もっとも、事実としては、作者イコール享受者の傾向がなかなか根づよく、それが俳句は第二藝術なりとする桑原旋風をまきおこす原因ともなったのだが、原則としては、けっして作者イコール享受者を主張しない。そこに、俳諧との明確な差がある。また俳句を享受するために、特別な訓練を要求することもない。普通にものごとを理解できる人なら、誰でも享受してくださいである。ただし、世の難解俳句と称するやつがあつて(324 ページ参照)、だいぶん世人を悩ませたけれど、あれは表現技術の難点から生じた結果なので、作った本人は、誰にでも理解されることを心から切望したに相違ない。要するに、俳句は「開放された世界」なのである。それが子規による革新のいちばん重要な眼目でもあつた(259 ページ参照)。

8. 江戸期には第二藝術でしかなかった小説は、いまや第一藝術の王座にのしあがった。第一藝術のはしくれであつた俳諧は、俳句の時代になってから、桑原氏に第二藝術のレッテルをはられ、桑原桑原と蒼い顔をする始末。これは、結局、藝術の土台になる社会の構造が違って来たからだが、どう違って来たかは、あまり専門的になりますから、省略します。とにかく、現代俳句に対するのと同様の頭で江戸期の俳諧を料理しようとするのは、適切でない。これがわたくしの申したい要点です。そして、それが、俳諧の時代と俳句の時代とを分けた理由でもあります。

P.19 ~ 22

[コメント]

私の尊敬する日本文学者で筑波大学教授の小西甚一先生の俳句のテキスト。1947 ~ 1948 年に行った高校生向けの講義ノートとして書かれたものなので極めてわかりやすい。但し、内容は一級。国語を教える先生の必読書の一冊。是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 27 日 林 明夫記 —